

都市公園における博物館的機能展開の考え方

堀江 典子 平松 玲治 森本 千尋

【要旨】

都市公園においては、資源の保全と利活用、公園としての価値・サービス向上とニーズ対応、普及啓発・教育の観点から博物館的機能、すなわち収集、保全、調査研究、展示、教育の充実が求められる。本稿では、平成20～22年度に取り組んだ科研費研究『「博物館学」の知の導入と連携による公園の博物館的機能展開手法の開発に関する研究』の成果として、一連の研究を踏まえ、博物館との役割分担と連携の考え方を個別の機能ごとに検討して整理したうえで、都市公園における博物館的機能のあり方を提示し、今後の研究課題を明らかにした。

【キーワード】

博物館的機能、都市公園、役割分担、連携、博物館学

花ハスを活かした展示手法に関する研究

宮部 秀一 堀江 典子 大浦 康史

【要旨】

都市公園では利用可能な資源の活用によって、緑豊かな環境の享受とともに知的な充足感を得られるような機能が求められている。本研究では、観賞用ハス（花ハス）の名所及び国営昭和記念公園における展示事例を調査し、花ハス展示のあり方について考察した。事例調査においては、特に屋外での展示状況に重点を置いて、展示手法の要素を、植え方、品種、配置、周辺の修景、解説・交流、物語性（固有の価値付け）の視点から整理し、各展示手法の特徴と課題について検討した。

【キーワード】

花ハス、展示手法、国営昭和記念公園、物語性

国営讃岐まんのう公園における光環境に関するオンツツジ管理について

元吉 啓子 尾澤 彰

【要旨】

国営讃岐まんのう公園地内飛竜木もれびの道におけるオンツツジの見所づくりにあたり、これまでの取り組みを整理するとともに、管理基準をもとに光環境の改善を図ったオンツツジについて着花率と光環境の変化をモニタリングした。開花調査の結果、除伐により着花率が向上していることが推察されたが、試験区、対象区ともに、着花率の最大値は低くなっており、継続したモニタリングが必要と考えられた。光環境調査では、除伐を行った翌年は相対照度が上昇したが、除伐後2年目には相対照度が下降に転じており、今後の着花状況を注視していく必要がある。また、今後の管理方針の目安として、取得できたデータを用いて着花率と光環境の関係について整理した結果、管理基準に基づいた除伐により光環境が改善され着花率が向上したこと、除伐の結果、明るすぎず暗すぎない適正な範囲に誘導されたことが推察された。今後の課題としては、オンツツジに関する継続的な研究および、香川大学との連携をさらに進展させるとともに、①長期的にモニタリングできる調査地の設定、②芽の数え方の整理、③サンプリング調査におけるサンプルの抽出方法の確立、④比較対象となる対象区の設定があげられる。

【キーワード】

国営讃岐まんのう公園、オンツツジ、着花率、相対照度

樹林地の景観管理技術に関する研究 -ヤマユリを事例として-

平松 玲治 山下 英夫

【要旨】

国営武蔵丘陵森林公園内の樹林地を対象に、良好な景観を保全・継承するための管理に必要な技術指針（案）の作成を目的として、樹林地内の動植物の現状を把握するための調査を実施して樹林地管理と自生する植物種や出現する動物種の影響を考察した。その上で、森林公園内の樹林地の代表的な自生種であるヤマユリに着目して、動植物調査や既存資料やヒアリングをもとに、景観管理を目的としたヤマユリの保全・活用に関する管理指針について提案した。

【キーワード】

樹林地景観, 国営武蔵丘陵森林公園, 生物多様性, ヤマユリ

ボランティアコーディネートの機能からみた公園管理のあり方について

森本 千尋

【要旨】

都市公園でのボランティア活動が活発化している中で、多様な活動におけるボランティアコーディネート業務についてその役割を整理するとともに、国営公園ボランティア担当者の業務の現状から、公園におけるボランティアコーディネートの課題について考察を行った。

【キーワード】

ボランティア, コーディネート, 公園管理

地域の記憶の継承における都市公園の役割

-防災の観点から-

堀江 典子

【要旨】

地域の記憶として継承すべきと考えられる事柄のひとつとして、災害等の記憶がある。防災は従来から都市公園の主要な機能の一つであり、大災害発生の都度、防災機能の充実が図られてきた。東日本大震災によって、行政による施設やシステムの整備といった「公助」に加え、国民一人ひとりの「自助」、「共助」が不可欠であることをあらためて痛感させられているが、都市公園においてもハード面だけでなく、地域の災害の記憶の継承の場となり防災意識や地域防災力の向上といったソフト面でも貢献できる可能性があると考えられる。本研究では、都市公園の防災機能の充実を図るため、地域の記憶の継承に焦点をあて、既往研究を踏まえ、災害の記憶の痕跡について横浜市中区を事例として検証したうえで、防災面から都市公園における地域の記憶の継承のあり方として、目的、対象、手段を整理し、考察した。

【キーワード】

記憶の継承, 災害, 都市公園, 碑, 防災教育

都市緑化植物園（緑の相談所）連絡会議の開催経緯と今後の課題

飯塚 克身 助川 靖 峰岸 徹 森本 千尋

【要旨】

都市緑化植物園（緑の相談所）の整備及び管理運営についての情報交換の場として、昭和 52 年より、「都市緑化植物園（緑の相談所）連絡会議」が開催された。当財団は、その第 1 回連絡会議から運営のサポートに関わり、以降、第 34 回の連絡会議まで事務局の役割を担ってきた。過去 30 年間の連絡会議の開催の経緯を整理し、今後の連絡会議の課題について考察した。

【キーワード】

都市緑化植物園連絡会議，緑の相談所，国営武蔵丘陵森林公園

『グッドプラクティス事例集』について

半田 真理子 伊藤 忠 川原 洋 嶺岸さゆり

【要旨】

『グッドプラクティス事例集』は、「公園レクリエーション世界大会 in 浜松」（第 20 回 IFPRA 世界大会）（2004 年に静岡県浜松市で開催）で採択された浜松宣言を広く普及し、“みどりのルネッサンス”を掲げる宣言の趣旨を具体的な行動に結びつけることを目的として制作された優良実践事例集で、国内外から収集した 43 事例を浜松宣言の 3 つの行動指針と 9 つの方向性に沿って取りまとめたものである（発行：2010 年 11 月）。本稿は、その『事例集』の概要（構成、内容など）および制作過程における特徴について報告するとともに、『事例集』の意義、および公園管理運営をめぐる中長期的な観点から捉えた今後の展開等について考察したものである。

【キーワード】

グッドプラクティス，パークマネジメント，パートナーシップ，プラットフォーム，浜松宣言

公園管理運営実態の事例調査報告

平松 玲治

【要旨】

都市公園の管理運営における特筆すべき事例を全国の都市公園等から 6 箇所抽出し、現地にてヒアリングによる調査を実施した結果の概要を報告する。

【キーワード】

都市公園，管理実態，事例調査

病児、障がい児の自然体験を可能とする 公園ニーズの把握及び公園サービスの開発に関する研究 ーそらぶちキッズキャンプでの実践を例にー

佐々木 健一郎 唐澤 千寿穂 橘田 節子 宮坂 真紗規

【要旨】

公園のさらなる利用増進を考えたときに、緑空間（公園）のもつポテンシャルを見直す必要がある。そのポテンシャルを医療・福祉分野で活用している1つの例である、難病の子どものための医療ケア付キャンプ場「そらぶちキッズキャンプ」での実践をケーススタディとして、病児、障がい児の自然体験に関する公園ニーズを把握するとともに、そのニーズに対応する公園サービスを実現可能な形で提案した。

そらぶちキッズキャンプは、難病とたたかう子どもという特に重症度が高く、より特別なニーズをもつ子どもを対象にしているが、多くの病気や障がいを持つ子どもたちは地域社会で生活をしていて、地域の公園に同様のニーズを抱いている。様々な労力がかかることかもしれないが、そのような子どもたちのニーズを受け止め、新たな公園サービスが実施されるよう試行・模索を続けたい。

【キーワード】

病児、障がい児、そらぶちキッズキャンプ、公園ニーズ

障害当事者の写真判読による公園バリアフリー情報の取得と それを利用したバリアフリー情報提供手法の開発

美濃 伸之

【要旨】

本研究では、障害当事者の写真判読による公園バリアフリー情報取得およびその提供手法について検討した。22年度は、海の中道海浜公園のユニバーサルデザイン検討委員会と連携しながら、写真を含めた公園バリアフリー情報を利用者事前に提供、実際の公園訪問時のコメントからそれについての過不足を明らかにすることで、写真判読とそれによる情報提供のあり方を考察した。結果のうち、‘移動’に関するコメントからは、園路の段差や路面の状態は注目される割合が高いが、それらを写真のみで正確に表現することは難しく、長さや高さ等については記述による補完が必要であると考えられた。また、‘楽しみ’に関するコメントからは、遊具等の‘遊び方’について、注目される割合が高く、写真による表現が適していることや、楽しみ方や利用者視線を表現する際に有効であることが示された。一方で、写真は有用であるが、開示情報が増える一方であるという問題点も指摘された。

【キーワード】

バリアフリー、障害者、情報、車いす、写真

子どもを対象とした環境教育プログラムによる公園利用サービスの開発

多田 充 藤原 宣夫 小河原 孝生 間島 大仁

【要旨】

公園における環境教育機能の意義は多くの関係者の認めるところであるが、実際にプログラムを運営して高い成果を得るには多くの困難がある。そこで本研究では、環境教育プログラムによる公園利用サービス開発のための基礎的データを得るために、子どもを対象とする環境教育プログラムに関する意識や問題点を①子ども（高校・大学生）本人、②学校教員、③保護者（幼児）の3者から調査、分析した。その結果、体験学習法によるパッケージドプログラムは参加者の評価が高く、かつ教育現場への負担の少ない有効な教育手段と考えられた。また幼児の自然体験活動では、保護者の意識は主に、子どもが参加を通じて獲得できる能力や体験の質に向けられており、自然環境だけでなくスタッフや参加者らの人間的魅力など、社会的環境にも高い注意が払われていた。

【キーワード】

アンケート, 評価グリッド, プロジェクトワイルド, 保護者, 教員